

第十回 美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2024.7.20

お題「声」



遠い声	上村多恵子	3
声なき声 アマリリス	下田喜久美	7
祝祭	北原千代	9
強くなりたいの	もみにゃーじ	1 2
不条理な声	波野 仁	1 4
祈り	清水崇彦	1 8
月の化身	スノードロップ	2 0
音声	春名江吏子	2 3
飛天	すみくらまりこ	2 6
声	石田真弓	2 8
朝の声	吉村侑久代	3 1
事件のあとに	有馬 敲	3 4

遠い声

上村多恵子

灰色のスイッチが消えると

もう何も聞こえなくなった

地球の回転とともに身体を躍らせ

たった一つだけ悔やむ

約束しておきながら

果たせなかったことを

それは一方的な

独りよがりの約束だったのかもしれない

しかし

行かなければならなかった

そこへ必ず

行かなければならなかった

そして声を出して告げたいことがあったのに

無念の言葉が

散り散りになって

すべりながら落下して

声にならない

叫びとなって

吸いとられてゆく

鏡の奥に何があったのかを

ようやく感じてきたのに

わかり始めてきたとき

風景が遠くなつて

もう約束の場所へ

ゆけないまま消えてゆく

いつしか果たしたかったし

いつかは果たせるものだ

なぜに信じて生きていたのだろう

すぐ手を伸ばしさえすれば

いつでも果たせたかもしれないのに

もう間に合わないのだけれど

約束することが

できたことだけでも

良かったと

立ち去りながら

声にならないまま

確かに感じている

声なき声 アマリリス 下田喜久美

わたしは目が見えない

あなたのことがないと あなたをみることができない

わたしはあなたの言葉を聞く

あまりにも真摯な愛の言葉を

わたしは答えることができない

遠い距離 許されない時間たち

夢のような物語 信じられないのに信じたい

夢であるうちは良いでしょう。

きつと長い日々の向こうに

蘇（よみがえ）る魂があつたのでしょいか

二人して手を取り合つて駆けていた日々が
美しい湖と山々 平安をこよなく惜しんで

考えたこともなかった

宇宙空間のなかの時間は きつとほんのひとつまみ それらを永遠となして

紅い物語の苦しみがわかる日

五月のアマリリスが満開に咲き膨らむ

わたしの庭に

祝祭

北原 千代

けやき えのき むくのき

ふる ふる ふる ふる

たかいそらから きいろいふぶき

もりのみち

すぎゆくひとら

ほおをあげ

てのひらさしだす

ふる ふる ふる ふる

きいろのけやき えのき むくのき

くびすじに

ほおに

かみにとまる

みあおぐひとら

きいろのいぶきに

なみだためている

もりじゅうの けもの むしたち

つちのしたを ながれる

みずおと

つちはけずり

かぜはゆさぶる

けやき えのき むくのき

さきをゆく ははが

ふりかえり

ふりかえり

きいろいか そこはぬくいか きいろいか

くちぶえのように

くしけずられ

うずまきに

まねかれて ははたちの

いにしえのきんらの はがれ

ぴしぴしぴし ことほぎのなきごえ

ふりつもる ははたちの こもれびのこみちを

強くなりたいの

もみにやーじ

心の奥にわだかまる

もやもやしたこの思いを

全て言葉に変えて

吐き出せたら

鉛色の空みたいに

どんより重いこの胸も

ほんの少しずつでも

軽くできるかな？

温かな気持ち 感じたい

硬直した心を 解かせるように

意固地な自分脱ぎ捨てて

軽やかに生きてみたいと

今 心の底から

願っている

この臆病さで何かを

守って来たのだとしても

もういないよ

もつと強くなりたいの

不条理な声

波野 仁

プラウダに告ぐ

急ぎ足で駆け抜けるのは

罪

シュプレヒコールが囃し立てる

ワインを片手に老人達が

猫の大道芸は見る影もなく

花びらの影は襟元を掠める

ヒンドウの僧侶が絡めた

恋

虹色の閃光は髑髏を穿き

齒痒いばかりに逃げ惑う

蟹の群れは齒車に寄り掛かり

ギスギスギスと夜を過ぐす

険しい顔の火星人は

傾きかけた月を穢す

辺り一面にひけらかした

罨

ぐるんぐると歌声はシャンソン

未だかつて無い黒い羊

旅から這い出て牧場に集う

神殿を擲る神官には

最後の砦は振り向かない

ブルトンは遮二無二寒がり

虚

近々魚は茹でられる

鶏はけたたましく羽搏き

正に深淵の宇宙を抱く

ばら撒かれた小骨は光る

無

痛み止めは頑なに謝罪せず

瞳が見事に表現されて

片時も離れずに煙を上げる

衆生よ弥勒は巡り狂う

空

地に満ちた泡沫嵩ませよ

ルーレットは無邪気な妖気

廻せ廻れ

卵は何時になく啜り泣く

祈り

清水崇彦

一九九五年 レバノン

内戦終結より五年

廃墟の街ベイルートに立つ

爆裂は血も骨も肉も

瞬時に瓦礫の下に埋めた

弔いも手続きもない死

ほんのあつけない死

彷徨う二十万人の死者

言葉を失い 声もなく

涙すらも忘れて

あるのは ただ祈りだ

数多の感懷を越えた祈り

経験は記憶されて感覚となり

感覚は昇華されてイメージとなり

イメージは結晶化されて魂となる

そして 魂は沈黙の祈りとなる

※一九九〇年五月、レバノン内戦終結の年、
二十万人の死者を悼むパフォーマンス展
「オペリスクの寺院」を東京で開催した。
その鎮魂の意味をあらためて反芻して、
一九九五年三月、未だ戦禍の夥しく残る
レバノンを訪れた。

月の化身

スノードロップ

君の声がききたい
そう云ったら
君はなんと
こたえるだろう

いつでもきけるのに
レコードもあるし
それでもやっぱり
そばでききたい

声は不思議だね
ドキドキする
落ち着かないけれど
元気になる

優しい声だね
誰からもそう云われて

「ありがとうございます」と
こたえていた

いつでもきけるけれど
レコードもあるけれど
それでもやっぱり
そばでききたい

あなたの声がききたい
そんなこと云えない
「こんばんは」と
これがせいっぱい

いつもみているけど
いつでも話せるけど
あなたは静かで
声をかけてはくれない

声は不思議だね

ドキドキする
落ち着かないけれど
うれしくなる

静かなひと
前から知っています
誰もが話すのに
話してはくれない

もしも叶うなら
月の光の中で
あなたの声を
きいてみたい

木や草や
眠ったふりをしている
ふくろうも
ずっとそのときを

おんじょう
音声とは

えり
春名江吏子

1

声は音か

耳に伝える心か

犬はほうびが欲しくて

ヒトの声に従うのか

いやいや

ヒトの合図で行動を共にする

犬の溢れる思い

犬にとってヒトは仲間

寿命は短い銃ごめん

犬たちの心を

ヒトは裏切るな

2

2004年12月26日スマトラ沖大地震

スリランカ島南部に襲った大津波

存在しない堤防 どこまでも海岸線

白い砂浜 内陸へ続く深緑の森

そこに棲むは野生象の群れ

大きくて分厚い それでいてやわらか

四本の趾（あし）に伝わった異常な波動

崇高な象たちにしか分からない

やんちゃな仔象たちにも一喝

草木（くさき）をいとわず押し倒し

群れをひきいる母象たちは

森の奥へ奥へ一目散

波動を撒き散らし逃げこんだ

大きな両耳をバタつかせ

仲間にも知らせた

野ウサギにも伝わり象に従った

ヒトは不思議な行動というが

これこそ音声 命の音声

象に聞け 象に学べ

ヒトびとよ

飛天

すみくらまりこ

幸せ香る飛天の住処。須弥山（しゅみせん）の天辺（てっぺん）を見よ。

天女が突き上ぐる風を待っている。

ふさやかな天衣（てんね）、ふくやかな霊芝雲（くも）、天翔（あまが）けに何の不足もない。遙かバーミヤンに新造仏（しんぼとけ）はおはす。

はや、宇（そら）に満ち、地にこだまする天人の呐哨（ちやるめら）、蕭（しょう）、笛、角（つの）、鼓（つづみ）。天童（てんどう）らは嬉々と蔓殊沙華を降らす。

天女は舞いつつ、宙（とき）を忘れて・・・千五百歳が過ぎた。

仏が身上（みのうえ）を察し、お像（すがた）をそっと抜け出たのはある新月の夜だった。

その直後、異教の徒は三が日かけて粉々に砕いた。

それを知った天女は地に泣き伏した。悲しい飛天は飛べないのだ。
すると瑞雲（くも）は地にまで降りてきて、仏の声がのたまわく、

「愛しい純な天女よ、心して聴け。像（かたち）は魂（こころ）の器なのだ。」

香林（こうりん）でわれを待て。時は来（きた）る。いつかきつと戻って来るから。」

◎バーミヤンの懸崖仏が爆弾で壊されたときの心痛む気持ちから作った詩。

声

石田真弓

嫌なのです

あなたの声が

長い間

それが愛せないのです

足の踵^{かかと}が嫌いで

別れたという人がいたけれど

私は

声のせいなのです

ああ、この空中には

声がいつぱいだ

声に拘こどわる女は発狂した

男は

無言になり

声の代わりに

楽器を奏でた

聴いているのは

湖

鳥

山

川

空

ああ、それで十分ではないか

分からぬ女など

捨ておけばよい

声はこんなにも

大地に沁みている

命の血を流して

朝の声

吉村侑久代

堤防の傍の菜畑から声がする

仕事の一つ終了したんだから

ミモザを狭庭に植えたら

三週間に一度の抗がん剤点滴の十回目を

終えたんだから

家のあちこちに置いてあるポトスの鉢に

栄養液をあげたら

ブルガリアの詩人との連作のゲラのチェックを

ちょうど終わったんだから

眼の手術をした友達に電話をしてみたら

サービス付き高齢者住宅を

私の傍で探している昔の同僚に

いいところがあるよと資料を送ってみよう

新聞の書籍広告の切り抜きを

ファイル帳から取り出して

買いたい本を決めよう

今日は部屋に籠って

穴の開いたセーターに細い針で

チクチクと刺繍をしよう

一週間前に買ったベレー帽にも

刺繍を試みよう

どんなデザインの刺繍って

知りたいの

それは朝の声よ

事件のあとに 有馬 敲

ひとりの人間が息を引きとるとき

おびたしいことばが死ぬ

静かにこの世を去っていったひとも

あわただしくあの世にむかったひとも

「ほんとうにお世話になった」

「ありがとう ありがとう ありがとう」

「もう駄目だ よろしく・・・」

「幸せになってください」

携帯電話で話されたさいごの声も

留守電に吹きこまれたメッセージも

メールから送られて途切れた文字も

ほんの一部でしかない

まして

緊急になにも伝えられなかったひとたちの

無数の無念のことばは

ついに記録されることがなかった

くり返し　くり返される

殺害現場のテレビ映像のむこう側では

死者たちの重い沈黙がうずくまり

濃い闇が立ちこめている

非売品

二〇二四七月二十日

(C) 日本国際詩人協会